

やんさノエ

会報

2004 No.2



発行 江差追分會

2004.7.20

北海道松山郡江差町中歌町193-3

TEL 01395-2-5555

FAX 01395-2-5544

ホームページアドレス <http://www.hakodate.or.jp/oiwake/>



宿願の江差追分節歌碑

濱谷 一治

江差追分節発祥の江差に追分歌碑が建立される。

鷗のなく音に

ふと目をさまし

あれが蝦夷地の

山かいな

いま江差追分のなかで最も多く親しまれ唄われている

「かもめの…」歌碑が欲しいという声が出てから久しい。

本場の江差にあるべきものが欠けている気さえしていた。

小樽祝津岬や寿都歌棄に見上げるような「忍路高島…」

の歌碑が早くから建っていることも意識されていたと思う。

今春、元江差町長で本会顧問の本田義一さんが「追分

節顕彰碑を建てて欲しい」と私に寄付の申出をされたこ

とによって建立が実現できるのはうれしい。

本田さんは町長在任の十六年間で、追分は江差にとって

かけがえのない文化だとテレビ局やマスコミに百度参り

して力説してきた。「江差弁の追分町長か」とニックネー

ムさえあった。

追分会館の建設に取組み、それが生涯をかけた町行政

仕上げの仕事として完成させた。

追分記念碑も本田さんの長年の宿願だったと思う。

四月二十五日本年度の総会で追分会支部会員のご賛同

を得て建立計画が決定され、実現に向けて動きはじめ、

江差追分節記念碑建立委員会が発足し、九月全国大会の

除幕を目標に取組んでいる。支部会員のみなさんのご協

力によらなければならぬが、お力添えで悔いのない記

念碑にしたい。

追分会館の前庭に建つ記念碑が人々の目を魅く日が待

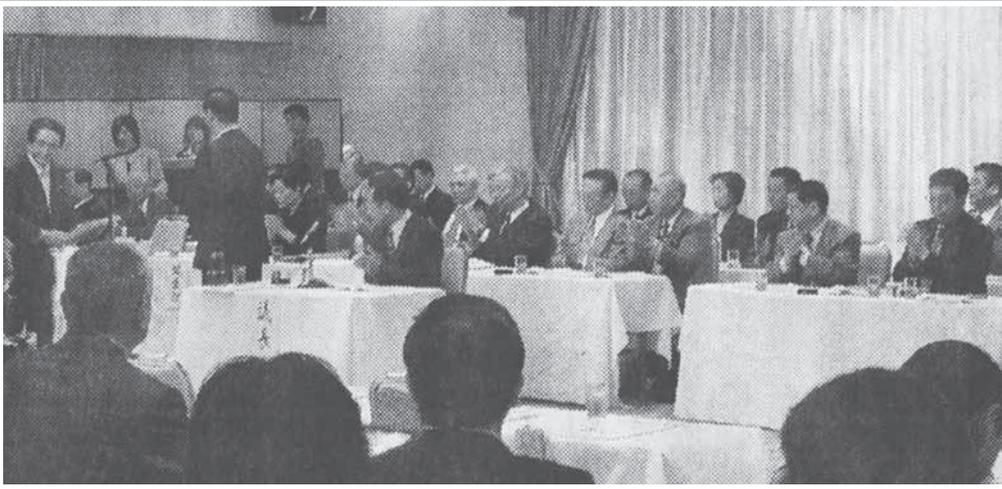
たれる。

(江差追分会会長)

江差追分会総会 江差追分顕彰碑建立を決定

江差追分会の平成十六年度総会は、四月二十五日、江差町ホテルニューえさしで開催、第四二回全国大会や、事業計画などを決定した。この総会で江差追分発祥の地である町内に「江差追分顕彰碑」を建立することが決められた。

(取材・松村 隆)



平成十六年度追分会予算は三千六六万八千円(前年比九二万増)となったが、内容的には、町財政の再建計画により収入町補助金一二七万六千円、追分会館の委託料一五七万五千円と大幅の減額となった。

支出では事務局費二二三万円(会館窓口業務)全国大会運営費九八万円に減額となる厳しい運営を迫られることになった。

町の逼迫している財政は当分好転の見通しがたたず、追分会の運営上、会費の値上げ改正が長年の課題として論議されてきた。昨年の総会で試案が提出され、理事会の検討を経て、今回正会員年額一人一、五〇〇円が二、〇〇〇円に改正される値上案が決定された。

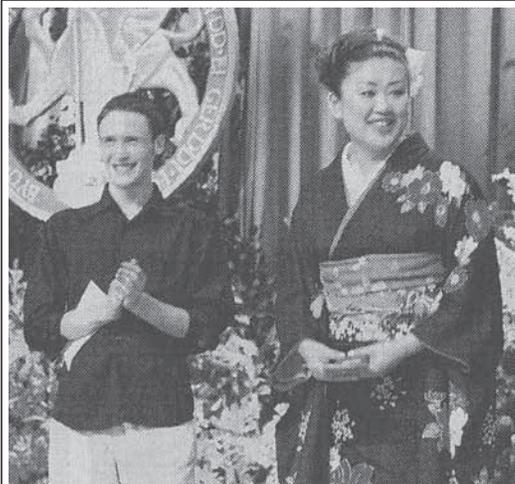
一方追分会員の高齢化により支部会員の減少傾向が著しくなっていることから支部定員改正の意見が出されていたが、運営や普及の上から現行の方針を変えないこととなった。

欧州最大の英国国際音楽祭

江差追分で木村香澄さん優勝

郷土音楽独唱部門

七月七日欧州最大規模を誇る英国のスランゴスレン国際音楽祭に出場した江差



追分大会優勝者木村香澄さん(三〇)が、郷土音楽独唱部門で優勝の栄冠に輝いた。

一九四七年から始まり、毎年各国から一流レベルの音楽家が参加し、十万人以上の観客が訪れる。

今回は世界四十三ヶ国の四百の団体個人が応募。郷土音楽独唱部門はテープ審査を経た十二人が六日の予選で三人に縮られ決勝戦が行われた。

木村さんは着物姿で出場、無伴奏の江差追分とギター伴奏のソーラン節をうたい優勝した。

「くちびるの形を微妙に変え、声量を制御した歌唱法が素晴らしい」と審査員から講評され、優勝のメダルを涙でうけとった。

木村さんは二日にギター伴奏関ヒトシさん、尺八山田正明さんと江差を出発、世界追分祭で共演したロンドン在住の音楽家広田丈自さんや英国北海道人会の激励をうけて音楽祭に臨んだ。

「唄に磨きをかけ、もっと江差追分の良さを伝えていきたい」と抱負を語った。

追分顕彰碑の建立は、元江差町長の本田義一追分会顧問が「顕彰碑建立に役立てて欲しい」と百万円を寄付したことから建立計画が提案された。

事業計画では、顕彰碑建立委員会を発足させ、全国の追分会支部、会員、愛好家から寄付を募り、五百五十万円の予算で建設するとされた。具体案は建設委員に一任され、九月全国大会までに建立する予定。

江差追分節記念碑建立に向けて

九月除幕を目標に建立委員会が取組み

五月十三日江差追分節記念碑建立委員八名を委嘱、濱谷一治会長を委員長に委員会が構成された。

委員会では本年九月第四二回全国大会までに建立する方針で、主要事項を協議して実施に動きはじめる。

- 一、設置場所は追分会館の前庭とする。
- 二、碑文は本唄歌詞「かもめのなく音に…」とする。
- 三、碑文揮毫は地元書家を選ぶ。

五月十八日委員代表五名が日高平取町に碑石調査に向き、大量の石材のなかから碑石の大きさ、形状、材質などを検



討の上、追分記念碑に最もふさわしいものを選定した。

碑石に選んだのは、石英の自然石で、高さ三・六メートル中二・六メートル重量約三五トンの大石。この碑石の見積り工費等が七五〇万円（諸経費含み）となった。

工事費等が計画額の五五〇万円を大幅に上廻る点が問題で再検討したが、募金については、支部、会員のほか一般有志、企業にも拡げて資金確保に取組むこととなり、支部会員に対しても当初一口（一万円）の口数を増口し募金をお願いすることとなった。

記念碑建立委員は次のとおり。

- 濱谷一治（会長）
- 青坂満（副会長）
- 宮下正司（副会長）
- 近江八声、小笠原次郎、房田勝芳、下川部久治（以上上席師匠）
- 佐々木基晴（名誉師匠）
- 館和夫、松村隆（以上学芸部門理事）

碑記は『江差追分節の里』

記念碑建立の趣意を碑記として一般的に裏面に掲示するが、その表題を『江差追分節の里』と表示することにした。追分節を育み磨いた北辺の風土とこの地で生き抜いた先人のくらしを表徴して「里」が最も適している表現という意である。碑記全文は次のとおり。碑記は石の形状から裏面にしたものである。

江差追分節の里

碑記

遠い昔 信州の浅間山麓に生まれた馬子唄は 北前船の船子や旅人達によつて この地に運ばれ 波の調べの中に 北辺の風土と人情を唄い込んだ名曲 江差追分節となつて 美しく花開いた

きびしい北国の暮らしに耐えながら この唄を守り育てた先人の心を受け継ぎ 唄の輪をさらに広げて後世に伝えることをねがう われわれのあつい思いをこめて この碑を建てる

平成十六年九月

江差追分会

趣意書 (写)

民謡は心の故里です。

それぞれの地域の生きた人々の歴史が唄い込まれて受け継がれ、人々の心を惹きつけます。

江差追分は三〇〇年の昔から、北辺の厳しい風土に生き抜いた人々の生き様が唄い込まれて磨かれてきました。

江差で生まれた追分節が、地域を越え、国を超えて多くの人々に愛され、親しまれ、心の唄として大きく成長してまいりました。

日本人の魂の唄とまで言われ、全国の心に根づいた江差追分の象徴として、更には次の世代に受け継ぐ思いを込めて『江差追分節記念碑』建立を企画いたしました。

民俗文化としての「江差追分節」を保存・伝承し、更に後世に受け継ぐためにご理解をいただき、ご支援下さるよう心よりお願い申し上げます。

江差追分会々員 有志一同建立
江差追分愛好者

提唱者

江差町名誉市民 本田義一

揮毫者

江差町 岩佐宏 岡

施工者

平取町 貝澤修 治

「江差追分と世界文学」……岩淵啓介

1 アイスランド

ミュージカル仕立てにもかかわらず、胸を締め付けられるような悲痛な傑作、デンマーク映画『ダンサー・イン・ザ・ダーク』に主演し、音楽も担当した歌手ビョークは、二〇〇〇年カンヌ国際映画祭のパルムドール（黄金のシュロの枝。最高賞）主演女優賞を得ている。

ビョークは、一九六五年、アイスランドのレイキヤビックに生まれた。幼いときから、アイスランドの民謡や童謡を聞きながら育った。地元で音楽・演劇活動に才能を示し、二十八歳のとき、英国ロンドンに移住し、世界的な音楽アーティストとして活躍している。

ビョークの育ったアイスランドには、古代北歐歌謡、神々と英雄たちの叙事詩『エッダ』が伝わっている。詩が歌となり曲節に乗って演唱される。

黄金時代の歌い手・詩人に、スノリ・ストルルソン（二一七八―二四一年）がいた。

「スノリのエッダ」の中で、山奥育ちの巨人の娘スカジは次のように歌う。

海辺の寝床は 海鳥の鳴く声
耳につきて 眠られず

朝ごとに 鷗は沖より帰り
われを目覚めさせ

これは、もう「鷗の鳴く音に……」のムードである。

夫になるニョルズは海辺の生まれで、山の暮らしが性に合わない。

山は嫌い 長居は無用

狼の遠吠えよりは

白鳥の歌が快い

この二人の歌を合わせ、ひと捻ねりすると、雅やかな江差追分の歌詞となる。

波の音 聞くが嫌さに

山家に住めば

またも聞こえる 鹿の声

日本では紀州熊野の神様が、海辺の御宮から、山の御宮へ遷ったときに歌う。

波の音 聞かすがための山籠もり

苦は色変へて 松の風

2 オペラのアリア

モーツァルトの歌劇『コシ・ファン・

トゥッテ』で、姉娘のアリア。

岩礁が動かず 風や嵐に抗して

武装して強いように

私の信義も愛も

江差追分では

荒い波風 やさしく受けて

心動かぬ 沖の岩

恋人の船出には「風よ 穏やかなれ

波よ静かなれ すべての物よ 恵みを賜え」と。これは「泣いたとて どうせ行く人 やらねばならぬ せめて波風 穏やかに」であろう。

（江差追分会理事）

バシキル民謡祭に江差追分参加

二〇〇四年 in Siba i

六月二十三日から二十九日まで、バシキルコルトスタン共和国シバイ市で行われるバシキル民謡祭に江差追分会から四名の代表を参加させることが事業計画で決められた。

バシキルは共和国独立前の平成二年江差町で開催された、追分旋律の唄をテーマにした『世界追分祭』に参加されていることから、追分国際交流の立場で参加することになった。

バシキル民謡祭に参加したのは、全国大会優勝者浜塚良幸さん、木村香澄さん、三味線演奏浅沼和子さん、尺八演奏の柳谷良逸さんである。

民謡祭を主催する同国文化省から追分会に参加招聘があったことで派遣したものの。

●第二十七回江差追分全国大会優勝者 千葉栄人さんの新曲発売

『江差慕情・江差追分』

カセットテープカラオケ付

定価 一、〇〇〇円（八月発売）

問合せ 〇一九一六四一一三六七五

盛岡市みたち二丁目一一二五



追分研修会

一枚のSPレコードを聞きながら(二)

懐古・江差追分を愛した山本麗子さん：高田 裕

昭和十一年十一月十一日。秋晴れ。

戦車よりでかい機関車が汽笛を鳴らしながら黒い煙をだしたら、ニシンが逃げるのでは、という心配をよそに、江差の街では朝からみんなお祭り気分のようにだった。測量開始から五年余り、念願の鉄道・江差線の開通の日である。

一方、追分好きの大人たちは、祝賀行事のひとつとして開催される「全道追分競演大会」も心待ちにしていた。(追分) だったら、余所者に負けられない、という對抗意識。いわゆる地元が札幌・函館勢などを迎えうつ初の全道大会である。その結果、江差地区代表のひとり、小笠原亀蔵が優勝したのだが、一際拍手をあげて注目されたのが、函館の山本麗子というオカッパ姿の少女であった。

詰木石(節)でも新地(節)でもない。こんな素直で、清々しい気分にくれ



山本麗子さん(昭和10、11年頃)

る追分は初めてだ、といつて感きわまり、握り拳で涙をぬぐう男もいたなかで、熱心に追分を聴いているイガクリ頭の少年がひとり。この少年こそ現在の江差追分界を代表する青坂満師匠であった。

改めて、山本麗子さんを紹介しよう。

本名・山本レイ。大正十一年十二月五日生れ。彼女は函館上磯町の商家のお嬢さんで、ご両親の寵愛をうけて育つが、四歳のとき不幸にして眼が不自由になる。で、盲学校の帰り道、ラジオ店の前で民謡を聞いて感動し、レコードで追分を覚えた、という。昭和八年(十二歳)、函館新聞主催の民謡大会で優勝し、テープル掛けを受賞。昭和十年(十四歳)、函館NHKのど自慢大会に出演し、江差追分で優勝。そして、既述の競演大会出場。

レコード会社も、こうした地方の逸材を発掘し昭和十二年、ビクター社は彼女と専属契約。江差追分(尺八・小金井正童または鎌田蓮童)はもとより

松前三下り、博多節や米山甚句、津軽よされ節・津軽小原節など民謡を

中心に数多くリリースし、盲目の歌姫、天才的少女歌手でキャンペーン。昭和十五年(十九歳)、一座の座長となって、樺太まで巡行。このとき、当時十一歳だった金谷(三橋)美智也少年も同行している。

昭和八年から契約が終る昭和二十二年まで、あの激動・混乱期の十三年余りの歌手生活。一に追分、二に博多、三に米山と言われたころの民謡全盛時代を想い出しながら、彼女は話をしてくれた。

「江差追分はやっぱり(民謡)の王様ですよ。レコーディングのとき、片面二分五十秒位で歌うように、とよく注意されました。追分はなかなか満足しません」

「伴奏の小金井正童さん。あの方は実は、段物(語り物)が得意なんです」

「鎌田蓮童さんのお母さん(旅館業)、ヒロ子師匠には時々、追分を聞いてもらいました。坂田光月さんや白倉新月さん、お世話になりました」：「あらあ」!?

お互い話に夢中になって、時が経つのも忘れ彼女の顔がうすボンヤリとしてきたとき、慌てて電灯を点けてくれた。彼女には灯りが必要なのだが、人を思いやる気持が、そうさせるのだろう。お茶をいれてくれながら、自然とでる笑顔がとても健気でよどみない。(うた)で人柄を聞く、とはこのことだろうか。

彼女の純粋な(追分心)が懐しい。
(江差追分会理事)

追分人生 青坂満物語

いさり火文学賞松村隆のノンフィクション北海道新聞夕刊連載はじまる。

五月十一日から毎週火曜日。

五、六歳のころから追分に異常な興味をもつ青坂満師が、潮の匂う青坂節の境地を開くまでの挫折と苦闘のエピソードを綴る。いさり火文学賞作者のノンフィクション。

青坂満師のわらし時代からの秘められたエピソードが、鷗島の自然や生家家族のかかわりのなかで展開される。師の少年期からの成長過程の人間像が、本場の追分風土を背景に描かれる初の半生記。

「次にながが出るか、青坂さんの生いたちがとても面白い。青坂さんの成長と追分の移り変わりもよく分かって楽しい」と連載が町の話題をよんでいる。

「いま追分界の頂点にある青坂師の人間味豊かな生き様を追分風土を背景にして書いて見たい。地元でなければならぬような人間像を追っている」筆者は語る。

夕刊「みなみ風」毎週火曜日連載、渡島松山、函館版、十二月まで二十数回の予定。

追分馬子衆の生活

……… 館 和夫



江差追分の源が、その昔、浅間三宿とよばれた、軽井沢、沓掛、追分あたりの馬子唄に由来していることは、今日、大方の見方になっている。

近世の初めから、しだいに整備された中山道の宿場には、人馬の継立てを行う問屋場があり、馬子達は年寄の監督のもと、馬指や帳付けとよばれる下役の差図に従って人や貨物の輸送にあたった。その他、大名など高位の通行人があるときは、近郷から人や馬が駆り出される助郷という制度があり、それによって臨時に働く馬子や、内職仕事に商用荷物や地元民の生活物資を運ぶ、中馬稼ぎとよばれる百姓の馬子達も居た。

伝馬の制では、宿駅間に定められた賃金があつたが、各時代を通じて低くおさえられ、その上、本馬一頭当り四十貫(約一五〇キロ、人が乗っている場合はその半分)という規定以上に荷物を負わせたなり、大して必要もないのに夜道を急がせたり、主人の権勢をかさに粗暴な振舞いをするなど、馬子達にとつて迷惑千万な客が絶えなかつた。

公用の馬方や人足でさえ、そのような状況であつたから、問屋口金を納めない闇荷物を運ぶ中馬稼ぎの馬子達の生活条件は、さらに貧しく惨めなものだつたように、追分節かどうかはわからないが、

信州中馬は乞食におとる

乞食夜寝て 昼かせぐ

という夜曳き唄の文句が遺されている。

ともあれ、三宿の中でも追分がおかれた環境はもつとも劣悪で、それだけに追分宿に付属して働いた馬子達の生活も厳しいものがあつたようである。

享保元年(一七一六)、追分宿から幕府の巡見使に差出された歎願書には、「追分宿の儀、浅間腰霧下石地川原にて作徳一圓無御座候」と、恵まれない土地柄を

述べた後、先年の飢饉のため、米、大豆等が値上りし、馬の飼料にも事欠き、また旅客や貨物も減少して伝馬の役が勤まらない状況になっていて、賃金の増額と諸大名の通行を懇願している。

追分宿が他の宿より生活条件が厳しく難澁していると訴えるのには理由がある。それは中山道と北国街道の分岐点に位置しているため、三方に人馬の継立てをしなければならず、負担が大きいこと、確水峠を抱えて定め賃金も高く、幕府から特別の扶助米を貰っている軽井沢や、田畑が比較的多く、上州の大笹方面からの商用荷物による利得が多い沓掛にくらべて、そのような収入が全くない追分宿は、その分余計に生活がきびしかつたと考えられるのである。

なお、このような歎願を重ねた末に下付される拝借金は、多くの場合、公辺に利息をつけて返却しなければならず、後にはその一部が宿場維持のための積立金にあてられたとはいえ、日頃から苦しい宿場住民の暮らしを圧迫する要因の一つになつたことは否定できない。

広い野原で、天衣無縫の追分節を唄っていたであろう追分馬子衆の生活も、各時代を通じて、内実はかなり苦しいものであつたらうと推察されるのである。

(江差追分会理事)

『江差追分うたがたり』

— 江差のまつり — 豊田市で公演

愛知三河支部が企画

愛知三河支部(渡辺傳次郎支部長)は十二月十九日、豊田市民文化会館で『江差追分うたがたり・江差のまつり』の開催に取組んでいる。

この企画は江差追分を育んだ江差の歴史文化にスポットをあて、江差追分と江差の唄を語りで紹介しようとするもの。

出演は支部会員と江差から青坂満、近江八声、小笠原次郎、辻真由美、木村香澄(以上唄)と踊り石田久枝、竹田美恵子などが出演の予定。

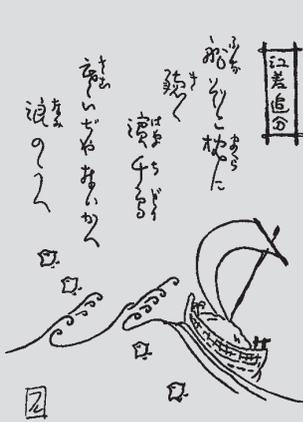
「追分の陰影・江差」松村隆写真展と同時展示。

出演構成

第一部 江差のまつり、唄と語りで綴る

追分節、江差の母唄、兄弟唄

第二部 江差追分 唄と踊り共演



支部の動き

石川県ハワイ州支部十周年記念大会 特別出演青坂満、小笠原次郎上席師匠 追分踊り(日立桑の実会支部)

六月八日石川会ハワイ州支部(ロイオオタケ支部長)ではホノルル市で、設立十周年記念大会を開催、日本から指導に当たっている石川恵司さん(東京恵陽会支部長)青坂満、小笠原次郎上席師匠と日立桑の実会支部追分踊り会員(桑名節子、鈴木昌子、小又ミキ子)を招いて江差追分と追分踊りを披露し、記念大会を盛りあげた。



石川会ハワイ州支部 十周年記念大会

大会は市内のホテルを会場に三百人が参加し本場の江差追分に熱中した。

ハワイ州支部は石川恵司さんの指導で追分愛好者二十名で平成六年に結成。以来石川さんは毎年二回自費で指導に向向いており、支部からは全国大会に代表を出場させている。

江差追分ブラジル支部大会

十九歳の新人海藤紀世さん 全国大会(江差)出場選出

江差追分会ブラジル支部(石川諭支部長)は五月二日サンパウロ市の北海道協会会館で、第十五回江差追分ブラジル大会を開催し、全ブラジルから二二〇人が出場、競演した。

江差追分は、子供、高年、一般、優勝者の四部門で競演が行われ、特に本年江差町で行われる全国大会に出場を決める代表選出の優勝者部門では、ベテランの出場者を抑えて、二世の新人海藤紀世さん(一九歳・タウバ市在住)が優勝して江差への出場を決めた。

各部門優勝者子供の部久保さゆり・高年の部会田郁子・一般の部猪又直子・再優勝者の部海藤晶子・ブラジル支部代表海藤紀世・審査員特別賞安田祐規柄。

第15回江差追分ブラジル大会



優勝 海藤紀世さんと石川支部長

江差追分と追分踊り

明石市民謡連合会にゲスト出演

第35回優勝細川澄美枝さんら

四月十一日明石市市民会館で行われた第24回明石市民謡連合会発表会で、関西地区追分会支部のメンバーが、江差追分と追分踊りでゲスト出演してつめかけた観衆の好評を博した。

出演したのは第35回全国大会優勝者細川澄美枝さん、尺八森田力雄さん、ソイ掛け森田力志さん(以上尼崎支部)三味線平地千鶴子さん(大阪なにわ支部)踊り早瀬タミさん、前川一枝さん(神戸支部)の方々でした。

出演には神戸支部山田小夜子さんの呼びかけによるものでした。



功労表彰者の決定

平成十六年度功労表彰者として長年にわたって支部指導者また伴奏者として指導育成と普及に功績のあった次の三氏を決定した。

尾形 綾子 旭川東支部長
矢吹 奈 登別隆声会支部長
福田 照明 和春会支部
(尺八伴奏)

支部設置を承認

平成十六年四月二五日理事会において新たに三支部が承認され、同日の総会で承認証が交付された。

一、早来町清志会支部 会員二六名
支部長 畠山 清
一、伊達湖声会支部 会員二〇名
支部長 青砥 弘
一、札幌眞舞支部 会員二六名
支部長 平中 眞吉

指導者の資格認定

平成十六年四月二五日理事会において正師匠など新たに指導資格者が認定され同日の総会で認定書が交付された。

正師匠 浅沼 春義 (和春会支部)
洪田 義幸 (厚沢部美和支部)
師匠 吉田 泰子 (苫小牧支部)
佐々木洋子 (旭川支部)
松本 力 (東京葛飾支部)
坪田 昭信 (乙部鷗翔会支部)
準師匠 佐竹 春敏・豊田 礼子
細川澄美枝・松長 辰雄
講師 飯尾 利雄・森井 洋祐
川奈野栄子・榊川チエ子
湊谷喜津子
準講師 高木 典征・青砥 弘
林 良幸・菅野 繁子
鈴木 紘風・島 節子
松村 善樹・丹野 武夫
江成 謙一・永井 嘉子
渡辺 欣三・須山 登
石井 建三

平成十六年度 第二回江差追分会

理事会が開催される

今年度の第二回江差追分会理事会が七月十七日江差町で開催され、二八名の理事が出席し次のとおり承認されました。
一、第四二回江差追分全国大会開催要綱について

・九月十七日の大会開始時刻を十時三十分からとする。
大会開始時刻は例年九時からであるが九月十七日午前九時より、江差追分会館前庭において追分記念碑除幕式を執り行なうことから、今年に限り開始時刻を変更するものである。
・大会の内容等は前年度と同様とする。

二、支部奨励賞の表彰基準について
支部の励みになればとの思いから、昨年度から創設された支部奨励賞の表彰基準については、各理事から多くの意見が出され検討の結果、次のとおり決定されました。
イ、支部設置十年以上で、会員数が四十名以上。

ロ、支部設置十年以上で、支部活動において、顕著な活動実績がある。
ハ、イ又ロに該当し、地区運営協議会を経由し提出されたもの。
※表彰の決定については、委員会の審議を経て決定される。

審議された主な事項を記載いたしました。が、その他事項で追分会の今後の運営等について建設的な意見が出されるなど、盛会のうちに終了いたしました。

あとがき

□追分節記念碑の碑石選びに建立委員代表が日高平取町に向いた。

江差の文化を代表する頼三樹三郎の「百印百詩」と「江差八勝」それに「江さし草創刊百号記念碑」の碑石もそこから選んだ。

広大な石置場に山積されている大小さまざまな石の中から、大きさ、形状、材質が追分歌碑にふさわしいものを選び出した。二、三点を更に見比べて碑石を決めた。海や波を感じさせ追分表現にぴったしだという意見が強かった。

□「かもめのなく音にふと目をさまし…」の本唄を碑文にする方針が決められていた。追分の歌碑である。追分歌詞はほかのものも含めて、北の自然とそこで生き抜いた庶民生活が長年にわたって詩われたものである。しかもこの詞は最も親しまれて唄われてきた詞である。庶民文学の粹といつていいだろう。

この追分節歌碑が他の文学碑とならんで唄文化を創りあげてゆくに違いないと思った。

□今号は平成十六年度総会記事が中心になったが、海外支部や派遣活動がきわだっていた。

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 山崎 透・森山弘之

沢田博生